

序

物事や考えを整理する際に必要な手続きの一つに分類がある。無秩序に散らばっている対象を分かりやすくするために、ある属性によってまとめ直すのである。したがって、どのような属性に着目するか、それをどのように利用するかによって分類の仕方は異なる。日常、会社や家庭でも、何らかの目的で分類が行なわれる。たとえば、会社では顧客の名刺を企業別に整理しておくとか、家庭では燃えるごみと燃えないごみを別にして出すといった類である。実はあらゆる学問も、こうした分類から始めて体系が成り立っていると言ってよく、どのような事象のどのような属性を問題にして分類がなされているかによって、専門分野が異なるわけである。逆に言うと、ある事象の体系的説明を試みることを職業とする研究者としては、どのような分類が提案できるかが、一つの課題にもなる。

ところで、ある事象进行分类するには、何らかの抛り所がなければならぬ。ある事象の属性として、仮にその運動の速度に注目したとすれば、早いか遅いかあるいは、その変化进行分类の抛り所にしているということになる。一般に、事象の状態・性質を表わすのに、反意語とか対義語と言われる一組になって互いに反対の意味をもつ言葉があり、これらは同じ属性にかかわる概念で捉えられる。「早い」「遅い」も同じ速度に関する概念で、品詞で言えば形容詞である。「進む」「退く」は動詞という共通の概念で対応している。ところが、こうした対義語の中に、同じ品詞で扱われないものがある。「有る」は動詞だが、その反対の「無い」という動詞はないのである。ということは、「有る」ということと「無い」ということは、同じ属性の概念では捉えられず、抛り所となるものは他の分類とは異なると考えてよかろう。たとえば、「美しい」という概念は「醜い」という概念なしに存在し得るが、「無い」という概念は独立して認識することはできない。このように考えると、「無い」という状態を発見するということは、極めて創造的な分類の抛り所を提案することになる。つまり、1と2の差と0と1の差は全く異質なものであると考えるのである。

もし本当の技術革新があるとすれば、それは在来体系の分類には「無い」管である。物理学などでは、すぐれた研究の、見事な仮説から始まった例はよく聞く所である。研究とは「無い」状況を限りなく追い続けることのようにも思われる。

1987年10月

清水建設株式会社技術研究所長

工学博士 太田利彦